

## 審査の結果の要旨

氏名 山田正行

本論文は、戦争責任問題を根底にすえた社会教育における平和教育論の思想的遺産の現代的継承という観点から宮原誠一の戦前・戦中・戦後の教育思想の展開を系統的に検討し、五十嵐颯による思索と継承、さらには地域における平和教育実践の展開にいたる過程を検証した思想史的研究である。特に戦中ファシズム期における言説の検討について文献資料にとどまらず、言論統制下の口述資料を読み解く方法を試み、さらに五十嵐については敗戦後の南方における捕虜生活時代の未公開日記や、生涯にわたって書き残された未公開研究ノートなど用い、宮原と五十嵐の「多面的重層的」思想構造と相互の関連性を浮き彫りにし、戦後日本の平和教育思想について新たな視点にもとづく解釈を試みた論文である。

論文は、序章、第1章から第6章、及び終章から構成されている。序章では、戦時下の言論統制のもとでの文献資料、口述資料から反戦反ファシズムの含意と論理をどのように読み解くかという方法的提起をふまえ、治安維持法で検挙されるまでの宮原と戦後の宮原を戦前・戦後の連続性において解釈する本論文の視座が示される。第1章では、宮原が「最も実践的な末端」をささえる人々の立場から社会教育学を構想し、マルクス主義とヒューマニズムに立脚して思想と実践を統合するアクション・リサーチを追求したことを明らかにし、第2章では、生涯にわたる言論と実践から宮原教育学の全体像を示している。第3章では、特に論争的に扱われてきた戦時下の宮原について、ペンネーム論文、宮原のデューイ解釈、近衛新体制のもとでの三木清の「文化政策」論との関連等々の詳細かつ多岐にわたる検討から、戦後につらなるダイナミックな論理の伏在に光をあてる。第4章では当時の状況的背景として鈴木庫三の「軍部赤色革命論」のもつ意味を検討し、第5章では、「優秀な」将校であった五十嵐が南方で捕虜になった直後から晩年にいたる生涯をつうじて、宮原を念頭におきつつ内省を重ね、1990年代に戦争責任『「わだつみのこえ」を聴く』を表明するにいたった思想形成の軌跡をたどる。第6章では両者をつなぐ象徴的な事例として秋田県の平和学習運動実践とアウシュビッツ展の展開にふれ、終章では戦後平和教育思想におけるマルクス主義とヒューマニズムの意義を考察している。

本論文は、戦後日本の平和教育思想を論じるうえで戦争責任問題を根底にすえ、戦前との連続性をふまえて戦後教育思想を再検討したオリジナリティの高い労作である。戦時下の言説・口述資料の解釈については、ひきつづき史実に即した検証がおこなわれる必要があるが、社会教育における戦争責任と平和教育の構想という主題をめぐる多くの論点を示唆しており、さらに新たな視点からの検証をよびおこすという意味でも今後の布石となりうる研究であり、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文と評価された。